

玉木田独步全集

第九卷

学習研究社

國木田獨步全集 第九卷（第九回配本）

G 六四三〇九

昭和四十一年十月十五日第一刷發行
昭和四十四年八月十日第四刷發行◎

定價 千八百圓

著者 國木田獨步

編集者 國木田獨步全集

編纂委員會

發行者 古岡秀人

東京都大田區上池臺四ノ四〇ノ五

印刷者 矢島貞雄

長野市西和田四七〇

發行所

株式會社 學習研究社

東京都大田區上池臺四ノ四〇ノ五

電話（七二〇）一一一一

振替 東京一四二九三〇

病牀錄

遺稿

補遺

他

目

次

病牀録

第一 死生觀	一七
第二 人物觀	四一
第三 戀愛觀	五
第四 藝術觀	三
第五 雜觀	九

遺稿

趣味の數々	一〇七
死と自覺	一〇八
欺かざるの記(抄)	一〇九
一句一節一章錄	一三〇
文學者——余の天職	一三三

死		一三五
趣味につひて		一三八
小鳥小話		一六六
中西屋		一四〇
鎌倉の裏山		一四一
戦場ヶ原		一四二
『覺帳』より		一四七
落日に對す		一五七
人物批判		一五九
家内反省錄		一六〇
七分の愛		一六三
忍びて事を爲せ		一六四
八月何日		一六六
八月何日		一六七

神と我		一六
元越山に登ル記		一七
驚異		一七
生存の自覺		一七
忍耐と勞働と		一七
信無し神無し		一八
渠のゆく末		一八
努めない		一八
諸君は鼠小僧である		一八
唯暗を見る		一八
人生何をか求むる		一九
人唯安臥を求む		一九
凡人の傳		一九
一語千金		一九

空	想		一九
此の我の存在		一九	
我が願		二〇〇	
天地の大事實		二〇四	
信仰生命		二二三	
信念		二四一	
社會と人		二五五	
孤獨		二七七	
一睨		二七六	
空想		二八〇	
自由		二八一	
奇異なる經緯		二八二	
追憶		二八三	
心の影		二八四	

隣人を愛せよ		二八五
規律と空想		二八八
人物崇拜		二九三
家庭文學		二九三
忍耐		二九四
對外策		二九八
我が規律		二九九
妻に守らする規律		三〇〇
彼		三〇一
久しぶり		三〇七
草の上		三〇九
素人噺		三一
準備		三二三
下窓		三八

林		三九
哀　　思		三一
波　　浪		三三
五月九日		三三
新らしき年來れ		三五
畫		三八
孤立の悲慘		三四
わが過去		三五
憐れなる兒		三七
我が過去		三四
潔の半生		三四
天地の祕密		三三
青年少壯の時代		三四
信仰と肉情		三六

補遺

唯皮相のみ		三六
信　　仰		三九
無　題　　錄		三〇
死は滅なるか		三七
プライド		三七

群書ニ涉レ		三七
田村先生の「先進及び大家」を讀んで		三一
近松の傑作		三三
人　　間		三六

田口卯吉氏を訪ふ	三六九
田口卯吉氏の手翰	三九三
軍艦の種類	三九四
外國語の必要	四〇九
『天の愛と地の愛』	四二一
婦人問題二則	四二九
人物ト其平生	四三二
福澤翁の特性	四五四
日本第一のレポーター	四六六
女學生と小説	四六八
ローラン夫人とカン子姉妹との交り	四七〇
バルンスの失敗	四七九
大奈翁の葬儀	四八四
老偉人の片影	四九〇

書簡補遺（續）	四九九
---------	-----

序・例言・畫贊

草稿第一緒言	五〇七
例言（「武藏野」）	五二〇
獻詞（「獨步集」）	五二一
余の作物と人氣（「獨歩集」序）	五二二
序（「漫畫一年」）	五二四
畫贊（「漫畫一年」）	五二五
序（「詩興畫趣」）	五二三

斷片

『三百年後の人の爲に』…………… 五七

創作メモ…………… 五八

経費は多し…………… 五二

短歌…………… 五三

雑…………… 五三

解題…………… 中島健藏…………… 五七

主なるヴァリアント…………… 六六

未確定雜稿

『文學界』第一號…………… 六九

『家庭雜誌』第五號…………… 六五

青年文學者の怠慢放逸	六五一
ジョンソン夫妻とカーライル夫妻	六五四
文豪トマス、カーライル壯年の時、其父母弟妹との間に	
往復せし書簡——家庭の模範	六五九
カーライルの書簡	六六六
余が最初の劇	六七五
天氣の話	六八一
西京料理素人評	六九〇
大阪料理	六九六
鯛 茶	七〇二
發刊の辭（『新古文林』）	七〇四
草稿斷片	七〇五